

5 年 1 組

「意味をつくる」とは 二つの行事に挑戦する子どもたちの姿から



二つの行事から意味をつくった わたしたち

5年生になってからの4か月、私は子どもたちと共に「共に在る」「意味をつくる」ということについて考え続けてきました。4月の学年集会で、子どもたちにこんな話をしました。「何かをやる意味は、最初からそこにあるわけではない。やっていながら、自分たちで意味をつくっていくことが大切なんだ」その言葉に伝えるように、子どもたちは運動会の「美と力」に向き合っていました。最初の頃の子どもたちは、「美と力」と聞くと、技を成功させることや、本番でよい演技をすることを思い浮かべていました。しかし、回を重ねる中で、子どもたちの言葉は少しずつ変わっていききました。「立ち姿も美と力だと思う」「授業に向かう姿勢も美と力だと思う」「運動会の時だけ頑張ればいいわけじゃない」そんな言葉が聞こえるようになったのです。

運動会を終えたEさんは、次のように綴っていました。「美と力は終わったけど、美と力の時だけ、本気じゃなくて、今でもずっと、本気で取り組むことが大切だと思いました。列に並ぶ時の立ち姿、授業に向ける思いすべてが、15回のためにあったんだと思います」。私はこの文章を読んだ時、子どもたちが「美と力」を経験して、その子なりの意味をつくっていることを感じました。運動会という一つの行事のためだけに頑張るのではなく、毎日の自分の在り方そのものが「美と力」につながっている。そんなことに気づき始めていたのです。また、Sさんは運動会当日を振り返り、「今日の自分、きっと100点満点だった。そして、美とは何か、力とは何かと何回も問われ、何回も考えた意味がわかったような気がしました。でもきっと、来年も問われ、考えると思います」と綴っていました。私はこのSさんの言葉がとても印象に残りました。

「美とはこういうものだ」

「力とはこういうものだ」

「5,6年生だから美と力をするんだ」

それらの答えを見つけたのではありません。むしろ、問い続けることそのものに意味を見出していたからです。運動会の中で、子どもたちは自分なりの「美と力」を見つけようとしていました。そして、その姿は学校教育目標である「共に在る」にもつながっているように感じました。自分一人で頑張るのではなく、仲間と共に作り上げるからこそ意味がある。そのことを、子どもたちなりに感じ始めていたのだと思います。運動会をもとに子どもたちは次の問いへ向かいました。

5年生は毎年、「飯縄登山鍛錬会」に挑みます。しかし、昨今の熊の出没状況を考えると、伝統である「飯縄山登山」は断念せざるを得ませんでした。しかし、ピンチはチャンスです。できないことを考えるのではなく、私たちがこれからの5学年の宿泊学習の「意味」をつくるチャンスがやってきたのです。これは私たちにしかできないこととして捉え、子どもたちと共に考えてきました。

今年の宿泊学習に向けて、子どもたちはテーマを「協力し合える5学年」と決めまし



た。私はその言葉を聞きながら、「意味をつくる」につなげて、子どもの姿をみようとなりました。

カレー作りの練習の日、その問いに近づくような出来事がありました。火がなかなか着かない班がありました。すると、ある班が自分たちの火の着いた薪を分けていました。その場面を見ていたSさんは、「仲間だけじゃなくて違う班の人にも、火を分けてあげようと思った人がいいなと感じました」と綴っていました。私はその文章を読んで、運動会の時のSさんを思い出しました。運動会では、自分なりの「美と力とは」を考えていたSさん。しかし今度は、自分の班だけではなく、学年全体へと視線が広がっていたのです。また、心に残ったのはRさんの姿でした。Rさんは振り返りの中で、「私は、班の子に『〇〇やって!』と強く言ってしまいました。そして、次は、『〇〇やってくれる?』と優しく声がけしたいです」と綴っていました。私はこの言葉を何度も読み返しました。カレーが上手にできたこと。火が着かないこと。そうした活動の結果だけを見るなら、見過ごしてしまうかもしれません。しかしRさんは、自分の言葉に目を向けていました。

さらにRさんは「みんなで、ちゃんと協力しないと、カレーは作れない。自分の行動一つでおいしいカレーになるのか、迷惑ではないか、そういうことを常に意識しないといけない。」とも綴っていました。私はここに、「共に在る」の姿を見ました。相手を思うこと。仲間を助けること。もちろんそれも大切です。しかし、その前に、自分自身を見つめることが必要なのかもしれません。自分の言葉はどうだったか。自分の行動はどうだったか。相手はどんな気持ちだっただろうか。そうした問いを自分自身に向けることができるからこそ、人は誰かと「共に在る」ことができるのだと思います。

宿泊学習が終わった今、私は運動会と宿泊学習は別々の行事ではなかったのだと感じています。運動会で子どもたちは、「美と力」の意味を考えました。宿泊学習では、「協力し合える5学年」の意味を考えました。どちらも答えを教わったわけではありません。仲間と過ごし、悩み、語り合いながら、自分たちなりの意味をつくってきたのです。そしてその歩みの中に、私は「共に在る」の姿を見ることができました。学校目標である「共に在る」。そして大切にしている「もっとやさしくなりたい」。その言葉の意味を、私自身も子どもたちも、まだ問い続けています。だからこそ、子どもたちと一緒に問い続けたいと思います。その問いが、これからの5年1組をつくっていくのだと思います。

子どものことばから感じる教師の在り方

「ことばを太らせていく子ども」と国語科の研究テーマを捉えなおした。その子が語る言葉、綴る言葉には、どのようにその子が表れているのか。子どもが様々な出来事や事象と出会い、どんな「言葉」が表出するのか、私はそこを感じられるようになりたい。たくさんの出来事があった5年生の4か月。その子がその子らしく思いを積み重ねてきたからこそ表れた「ことば」が、周りの子どもたちとつながりあっていったとき、「ことばを太らせていく」が見えてくると思う。だからこそ、一つひとつの出来事に私たちなりの意味をつくり、意味を、そして「ことば」を太らせていけるクラスとして、夏休み明けも歩んでいきたいと思っています。

